

注:このPDFファイルは、以下の論文の著者作成版です。
中村美知夫 (2006) 「言語のない社会を記述するとはどういうことか」『人間文化』 21:27-30.

言語のない社会を記述するとはどういうことか

中村美知夫

京都大学大学院理学研究科

はじめに

私は霊長類の社会の研究をしている。あたりまえの話だが、ヒト以外の霊長類は言語を持たない。手話などを用いて類人猿に言語を覚えさせる研究は、彼らがある程度の言語的な潜在能力を持っていることを教えてくれる。たとえば、類人猿たちは数百程度の単語を覚え、それらを組み合わせることで人間に意思を伝えることができる。そしてそういった手話は、彼ら同士の自発的なコミュニケーションに使われたり、子どもの世代に伝播したりもするらしい(たとえばファウツとミルズ、2000)。ただし、少なくとも野生下では、観察者である私たちに対して彼らが言語を使って何かを言うてくることは決してない。

この点、観察者が自分と同種であるヒトの社会を研究するのは大きく異なる点である。どれほど異なる社会を研究する場合でも、対象がヒトの社会であればそこには言語がある。たとえ通訳を介するなどの回り道をするとしても、対象の人々が語ることをまったく無視して研究することはほとんど不可能であろう。文化人類学や社会学などでは、インタビューは一般的に用いられる方法であるし、場合によっては、日本語には直接翻訳できない形で彼らが語ることに、彼らの社会を理解するキー概念を発見することすらあるだろう。

研究対象がヒト以外の場合、そもそも相手が言語を持たない以上、こういった手法は使えない。例外的に上記のような言語学習のような場合には、類人猿が発する手話単語などを理解の手がかりにすることは可能である。ただし一般的には、ヒト以外の動物の社会を研究する場合、彼らの行動を直接観察して記述するという作業をおこなう以外にないのである。

行動は言語で表現される

伊谷の代表的な著作の一つである『霊長類社会の進化』(1987)の中に「社会構造をつくる行動」という論考がある。この中で伊谷は、「いかなる行動もわれわれの言葉で

表現される」ということをまず率直に認めている。黒田(1999)や菅原(2003)が指摘するように、この点は大変重要であると私も思う。

いまや霊長類学は行動学の下位分野になりつつある。だから、擬人主義に陥ることを避けて、なるべくニュートラルな語を用いるようにという圧力がかかることが多い(たとえば、サルの心的状況が客観的には分かりえないのに、サルが「喜んでいる」などと安易に言うてはいけない)。ただし、ニュートラルな語を用いたからといって、問題がすべてなくなるわけではない。いかにニュートラルに思われる語であっても、言語はあくまで私たち観察者の側にあり、動物の行動を切り取って名づけるのは私たちだからである。また、擬人的な匂いのする語であっても、権威のある研究者がいったんある意味で定義して使い出せば、その後普通に使えるようになる場合もある。こういった語はどう考えてもニュートラルとは言いがたい。

このような問題は現在の霊長類学では軽視されがちであるが、まともな社会を記述しようとするならば、私たちはそれに無自覚であるわけにはいかないだろう。逆に言えば、私たちは彼らの社会を描き出すときにどのような語を用いるのか、もしくはどのように現象を切り出してくるのか、といったことに苦心することになる。

さて、霊長類の行動をわれわれの言語体系から切り離せないと考えた伊谷は、とくに動詞に注目して、「アクションのための語」から「文化、制度と行動」まで、重層的な構造をなす10個の類型を提案している。最終的に伊谷が強調したのは「社会的な形成と維持に関わる語」という類型で、とくに「許す」「許さない」という語と、それぞれの受動態が、社会構造の理解に重要であると主張している。むしろこれは、伊谷が社会構造の進化ということを突き詰める上での議論である。本稿では、これらの行動類型をヒントにしつつ伊谷が強調したのは少し異なった観点から議論を進めたい。

以下では、伊谷による10個の類型のうち「行動パターンのための語」と「関与の様態をあらわす語」の二つに注目する。なぜとくにこの二つかというと、直接的には「毛づくろ

いをする」という語がこの二つの異なる類型に含まれていたからである。私はチンパンジーの毛づくろいを研究対象としているので、この語を使うことが多い。しかし、一つの語が次元の異なる二つの類型に含められるということは、私の研究対象となる語が入っているということ以上に、もっと一般的に社会を記述する際に重要なことを意味しているのではないかと考えるようになったのである。

「行動パターンのための語」

まず、「行動パターンのための語」であるが、この類型の語は、社会的な相手を前提にしておこなわれる独特のパターンを持った行動に対してつけられている。具体的な例として「プレゼントする」「マウントする」「乞う」「毛づくろいをする」などがあげられている。たとえば毛づくろいの場合、場所や相手や自分の姿勢などに関わらず、その独特のパターンが見られれば、それは毛づくろいしているのだということになる。

伊谷はさらりと書いているのだが、この類型の語は、受動態にすることによって、相手の個体の立場を表現することができる、という点は重要である。すなわち、ある個体の「マウントする」は、視点を変えれば、その相手の「マウントされる」になるわけである。同様に「毛づくろいをする」は「毛づくろいをされる」にすることができる。このことは、この類型の語では、社会的な相手が前提とされているものの、基本的にはその行動はある個体に帰属させることができるということを意味している。たとえば、個体Aが個体Bを毛づくろいしているとしよう。この場合、あくまで「毛づくろいをする」という行動は個体Aに帰属している。個体Bには、その鑄型としての「毛づくろいをされる」という行動が帰属することになる。

以下とくにこの類型について述べる場合には、「毛づくろいをする」「毛づくろいをされる」を単に「する」「される」と呼ぶことにする。

「関与の様態をあらわす語」

「毛づくろいをする」が含まれるもう一つの類型が「関与の様態をあらわす語」である。伊谷はこの類型を以下のように説明している。「相互的な社会交渉あるいは社会的状態をあらわす語で、ある特徴をもつ行動を複数の個体が同時におこなっており、主体もそれに参与しているとき、そういった概括的な状態の表現に用いられる。」

この類型には、他に「争う」「闘う」「遊ぶ」「まとまる」「移動する」などが含まれている。これらの語が、先ほどの「行動パターンのための語」と明らかに異なるのは、この類型の語は、すでに誰か特定の個体には帰属させられえない、と

いう特徴をもつ点である。

たとえば「遊ぶ」の場合(ここではあくまで社会的遊びを考えている)、遊びの要素としての「かみつく」や「たたく」、そしてその鑄型としての「かみつかれる」や「たたかれる」などは、どちらか一方の個体に帰属させることが可能である。しかしながら、「遊ぶ」ということ自身は決してどちらか一方の個体だけに帰属するわけではない。「遊ぶ」という語は、参与する個体たちのさまざまな行動パターンを含む関与の様態を示しているからである。同様に、「まとまる」という語もまた特定の個体に帰属させることはできない。「近づく」とか「その場に居続ける」とかいうことは個体に帰属可能でも、「まとまる」ということは全体でようやく成し遂げられている。だから、特定の個体だけがある動きをしても「まとまる」ことにはならない。

「毛づくろいをする」の場合、少々ややこしい。再び個体Aが個体Bを毛づくろいしている姿を想像してほしい。この状況は、Aに帰属する「する」と、その鑄型でBに帰属する「される」という語で言い表すことができた。「関与の様態をあらわす語」の意味では、AとB二頭があわさって「毛づくろいをする」状態に関与していることになっているわけだ。この意味での「毛づくろいをする」はけっして受動にはならない。ここでは、能動 - 受動に分けることは不可能で、両者をひっくりめた形で毛づくろいという相互行為に両者が参与している、ということになる。

「行動パターンのための語」と「関与の様態をあらわす語」は、いずれも社会的な行動を表す語なのだが、それを見る次元が異なる。原則的には、「行動パターンのための語」は特定の個体に帰属させることができる語であった。「関与の様態をあらわす語」は特定の個体には帰属させることはできず、参与する個体全体もしくは個体と個体との間に位置することになるだろう。私には、このような「関与の様態をあらわす語」のほうが「社会的」であることの本質により近いところにあるような気がしてならない。

分解できないものを分解する？

現在、霊長類の社会行動を研究する枠組みでは、圧倒的に行動は個体に属するものとして捉えられることが多い。つまり「行動パターンのための語」のほうは、いわゆる社会行動として分析の対象となっているものとなりによく一致するわけだ。誰が誰に何回毛づくろいしたのか、されたのか、誰が誰に何回接近したのか、されたのか、といったデータは霊長類の社会行動の研究においてしばしば収集され、累積され、分析されるものである。そしてそれは、現在の社会生物学的な方法論の中では究極的に個体の繁殖戦略の一環として位置づけられている。

一方で、特定の個体に帰属させられないような現象は、そのままでは扱うことが難しい。かといって、それを個体に

属する形に分解してしまうと、それはこの類型の語が示すものとは異なったものになってしまう可能性がある。たとえば「遊び」という現象は、個々の行動に分解してしまうと、しばしばその本質から離れてしまう。遊びという現象が定義しにくいこと(早木、2002)や、なかなか現在の社会生物学的な枠組みの中では扱いにくいことなどは、このことと無関係ではないだろう。

さて、前節で見たように、個体Aの「する」と個体Bの「される」は、合わさって全体で「毛づくろいをする」という語で言い表すことができた。しかしこのことは、全体での「毛づくろいをする」という相互行為が、個体レベルの行動につねに分解可能であることを意味するわけではない。たとえば、チンパンジーは同時に二個体がお互いを毛づくろいする相互毛づくろい(中村、2003)をかなり頻繁におこなう。これなどは、いったいどちらの個体が「する」と言えばいいのか。両方の個体が「する」かつ「される」という状態にあるわけだから、単純に「する」がどちらか一方の個体に帰属するわけではないのは明らかである。また、二つの「する」-「される」が単純に二つ同時に重なっていると考えるだけで済む問題でもないように思われる。

さらにチンパンジーでは、三頭以上の個体が同時に毛づくろいに参与する場合も少なからずある(中村、2002)。最も単純な形で示すと、AがBを毛づくろいし、BがCを毛づくろいするといったものである。全体としては「毛づくろいをする」という状態にあることは言うまでもないのだが、これを個体ごとの能動と受動に分解してみるとどうなるのか。この例での個体Bは「する」状態にあるのか「される」状態にあるのか。このような毛づくろいを始めとして、社会行動というものとはそもそも、局所的に見れば能動-受動に律されつつも、全体としては能動-受動に分解不可能とでもいべき二面性を持っているわけである。

再び「関与の様態をあらわす語」

言語を持たない社会的な生き物の社会を描き出そうとするとき、現在の生物学は特定の主体(というか主体ですらない個体)に帰属する「行動パターンのための語」のレベルでしかそれをしていないように私には思われる。そして、特定の個体に還元しきれない社会的現象を目の当たりにしたとき、しばしば我々はそれを記述する言葉に窮してしまう。

伊谷の類型に現われる「関与の様態をあらわす語」というものは、個に分解できない現象を理解する際にそれなしには済ますことができない語であるように思う。それは、しばしば社会的な「コンテキスト」とか「場」とかといった言葉で表されてきたものに近いのかもしれない。

しかしながら、残念なことに、伊谷はこの「関与の様態をあらわす語」という類型に関しては、あまり多くを語ってい

ない。じつは、この類型はすべての類型の中でももっとも説明が少ないのだ。伊谷は「いわゆる社会的な促進に裏づけられている」と述べるにとどまっている。しかしながら、社会というものを考えるときにこの類型はかなり根源的なものではないかと私は考えている。なぜならこの類型は明らかに「集まる」「共存する」ということと不可分だからだ。そういった共在がそもそも可能でないと、本来社会交渉をおこなうことすらできないのだから。そして、私たちが霊長類という言葉をもたない社会的存在の生き生きとした側面を記述をする際に最も重要で、なおかつ扱いが難しいのが、この類型ではないかと思う。

もちろん、行動というものは個体の存在なしには成立しないものだし、個体の行動なしには社会は成立しない。しかしながら、こういった個体に帰属させられない形で表される相互行為という視点が社会を記述する際に不可欠なものではないかと、私には思えてならない。

引用文献

- ファウツ R, ミルズ ST. 2000. 『限りなく人類に近い隣人が教えてくれたこと』高崎浩幸・高崎和美(訳) 角川書店。
- 早木仁成 2002. 『遊びの成立』『マハレのチンパンジー: (パンソロロジー)の37年』西田利貞・上原重男・川中健二(編) 京都大学学術出版会 pp. 321-343.
- 伊谷純一郎 1987. 『社会構造をつくる行動』『霊長類社会の進化』平凡社 pp. 223-245.
- 黒田末寿 1999. 『人類進化再考 社会生成の考古学』以文社。
- 中村美知夫 2002. 『集まりとなる毛づくろい』『マハレのチンパンジー: (パンソロロジー)の37年』西田利貞・上原重男・川中健二(編) 京都大学学術出版会 pp. 345-367.
- 中村美知夫 2003. 『同時に「する」毛づくろい チンパンジーの相互行為からみる社会と文化』『人間性の起源と進化』西田正規・北村光二・山極寿一(編) 昭和堂 pp. 264-292.
- 菅原和孝 2003. 『「サルとヒトの連続性」思想の敗北と逆襲』『生物学史研究』71:73-76.